

浪花大雷落場所附

この瓦版は、「日本気象史料」(第3巻)追補に、次のように集録されたものである。

夜 大阪 兵庫 堺大雷二百餘ヶ所へ落雷
今左に其當時の讀賣の全文を擧げて以て参考とす安政三年丙辰八月十一日夜子刻浪花大雷落場所附け 當夏は日でりつゞきにて五月より雨ふり申さず六月に至りても日和つゞきにて七月十四日に少しふり其儘にてます―日でりとなり所々雨乞等有之候へども其しるしもなく八月十一日くれ頃より曇出しはげしく其夜子の刻より大夕立にてあたかも大地を引さく如く光りつゞけ鳴つゞけ生きたるこゝ地もなく子は親にしがみつき親父はかかにしがみつき夜の明るを待ち兼る(下略)

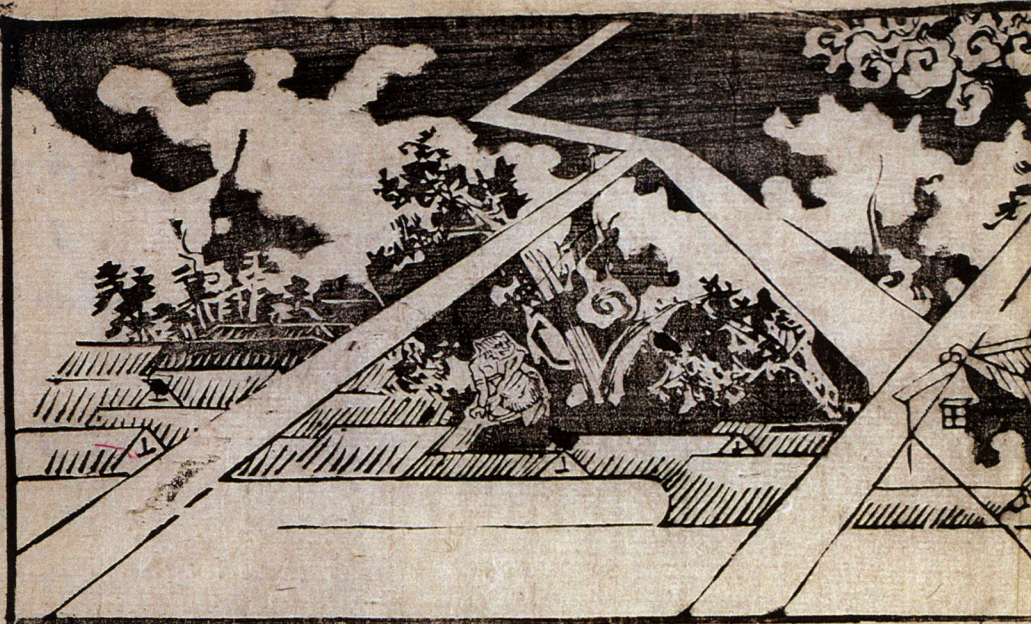
この落雷については、「日本気象史料」で

は先に第2巻第3編で、大阪落雷三十八所として「今日抄」の次の記事を集録している。

夜 大阪大雷 震三十八處

日本気象史料の記事の出典は第2巻の巻末に引用書名一覧として明らかにされているが、数えてみると、吾妻鏡をはじめその数は約600冊にのぼる。この600冊以外の史料(この瓦版もその一つ)を集めたのが第3巻の追補である。

ところで、大阪の雷の記録は安政3年(1856年)の前は文政5年6月(1822年)であり、これより後は慶応元年(1866年)であるから、当時大きな雷災はそれほど多くはなかったと思われる。安政3年の雷災が瓦版になるほどのビックニュースであったことは、充分うなづける。



日 本 場 上 り 切	水 新 や ー ー	お ち ー ー 井 子 井 子	禪 修 村 家 之 新 焼	尾 之 橋 小 橋 橋 子 破	新 町 橋 之 側 後 丁	日 本 橋 横 町	新 町 正 一 丁 本 口	下 橋 表 門 十 月 沼 や	生 玉 島 居 前	上 塩 丁 夕 龍 寺 前	寺 の 町 寺 々 丁 本 々	三 丁 寺 寺 寺 寺	阿 波 橋 小 橋 東 橋	三 丁 寺 寺 寺 寺	八 尾 町 寺 寺 寺 寺	橋 下 勿 明 石 数 々 所
玉 道 三 新 茶 屋 中	橋 丁 安 田 町 寺 寺	該 該 丁 中 橋 西 太 田	裏 門 橋 西 橋 寺 寺 寺	老 安 橋 中 玉 道 橋 寺	安 治 川 新 橋 町 寺 寺	の だ 町 寺 寺 加 茂	下 寺 寺 寺 寺 寺 寺	九 条 村 寺 寺 寺 寺	小 寺 橋 村 大 根 橋 寺	日 本 橋 岸 の 寺 寺	佐 吉 加 賀 寺 寺 寺	日 本 橋 寺 寺 寺 寺	日 本 橋 寺 寺 寺 寺	さ ー ー 金 寺 寺 寺	日 本 橋 寺 寺 寺 寺	日 本 橋 寺 寺 寺 寺

安政三丙辰八月吉日夜半刻

かふハおりかみかりおちをづけ

浪集重集場

苗夏ハ是より後此まで九月より雨降りきたり
六月よりありても雨降つてきお七月末にわこ
ありは候あてまはる日なりとありき雨も木
あきりともきき下もあき八月土月日くれは
ありき山けききききききききききききき
大々きききききききききききききききき
はきききききききききききききききき
つきききききききききききききききき

さこ場臭市場

中ノ橋溪松花庭

小湊きき目荒ノ内

新地側中津荒庭

佐後丁中橋場集

本町人あきききききききききききき

あき町せんじん木

元町お船日航破ル

坊江市池をー

持統様お交書本

阿波あきー西入

安土町 殊忠

権登町けんさい橋

幸町二丁目 寺松

雪路登すお後すじ

日 業や大初

堂信 正ヶ辻

老人場を造る所 鴨二町

